

会員紹介：佐々木弘世さん

私の略歴



1951年4月、東京都世田谷区生まれ。（小学校を卒業する頃まで小児喘息に酷く悩まされ、喘息の発作の苦しみは今でも時々夢に見るほどです）1976年早稲田大学教育学部を卒業し、ODAの実施機関である特殊法人国際協力事業団（JICA）に入団。JICAでは2回に亘るインドネシア事務所での勤務を初め、人事部、企画部等の部署を歴任。途中JICAの海外長期研修制度でアメリカ合衆国ジョージタウン大学大学院及びピッツバーグ大学大学院に留学し修士号を取得。2012年6月に理事を退任するまで約37年間JICAに勤務。現在は東京海洋大学及び中央大学において国際協力・国際開発に関する講義・演習の担当や大学が進めるグローバル化促進事業等を特任教官として勤務中。

国際協力に関わる動機

早稲田大学入学当時は学生運動が最後の盛り上がりを見せた時期でもあり、在学中かなりの時期、大学がロックアウトのためキャンパスに入れず、周辺の喫茶店で友人と「天下国家？」について口角泡を飛ばしながら議論していた時代でした。高校時代に非常に強い影響を受けた教師との出会いにより、大学卒業後は教職（教員免許は取得していました）に就くことを考えていたのですが、当時所属していた学内サークルに東南アジア諸国（特にインドネシア、フィリピンからの留学生が多かったと記憶）からの留学生が多く含まれており、そうした友人との交流を通じて感じた海外への憧れや東南アジアと日本との深い繋がりから、誕生間もない特殊法人国際協力事業団（JICA）に入団しました。（JICAは1974年に海外技術協力事業団と海外移住事業団が統合されて創設された）

従事した仕事の内容

JICAでの勤務期間は日本のODA予算が倍増・倍増で増大していく時期とほぼ軌を一にする時代で、特に1989年には米国を抜いて世界最大のODA供与国となり、また1997年には我が国のODA予算が最大規模になった時代でした。そうした意味からは、毎年行われる予算要求の作業の中で新たな事業やスキームを関係者で議論しながら予算の獲得に向け努力していた時期であり、非常に熱気に満ち、ある意味で上昇機運の中で活気に満ちた時期に仕事ができ、非常に幸運であったと言えるかもしれません。そうした中で私のJICAでの勤務に関して言えば、海外勤務が2回のインドネシア駐在であったように、同一部署や類似分野での繰り返しの業務が大変多く、約37年間の業務は計約11年間の人事部門、計7年半のインドネシア勤務、計7年半の鉱工業・産業育成分門での勤務に概ね集約することが出来ます。このうち特に人事分門では計11年間人

事・労務関連業務に従事していたこととなります。自分から人事関係の業務を希望したことは一度も無く、寧ろ管理部門での勤務は出来れば避けたいとずっと思っていたような気がします。ただ今思えば人事関係の業務は自分にとって極めて貴重な経験であったと思います。

人事部門

JICA が行う業務の一つが開発途上国に対する技術協力であり、その技術協力の柱の一つが途上国の人材育成ですが、人事の業務も JICA の人材育成であり、「人のモチベーションを高め、人を説得し、共感を得ながらある目標の達成を目指す」点においては共通点が多く JICA での技術協力を考える上でも人事部門での経験は極めて重要な役割を果たしたものと考えています。

鉱工業・産業育成分門

特に東南アジア地域においては 1985 年のプラザ合意以降自動車の様な日系組み立て産業の進出に伴い、所謂裾野産業等が技術協力の中心業務になっていましたので、産業開発部門の勤務を通して中小企業振興、特に途上国の産業基盤の強化のための中小企業振興に直接携わることが出来たことは、同時に、戦後の日本における中小企業振興の経験をしっかり学ぶ機会が得られることになりました。これによって、中小企業の持つ技術開発・雇用・産業基盤の強化の重要性をかなり深く学ぶことが出来、自らもかなり真剣に中小企業診断士の資格取得に向け努力するなど、その後の JICA 人生に大きなインパクトをもたらしたと考えています。

国際協力総合研修所調査研究課

僅か 2 年半と短い期間ではありましたが、JICA 国際協力総合研修所調査研究課での勤務ではその当時開始された国別・課題別援助研究会や技術移転手法研究を担当する機会を得、特に国別援助研究会では故大来佐武郎先生（中国援助研究会座長）や石川滋先生（エジプト援助研究会座長）から直接薫陶を受けることが出来た事は何にもまして私にとって忘れることの出来ない貴重な経験でした。こうした著名な学者の研究に対する非常に深い真摯な姿勢を学ぶと共に、現地研究や基礎研究の重要性について改めて深く認識することが出来たと考えております。

国際開発との関わり：インドネシア勤務

上記の様に JICA での勤務は人事関連業務など管理部門の業務にその大半の時間従事したというのが実情ですが、今国際協力の現場で国際開発にどの様に関わったのかと思えば、脳裏に走馬燈の様に鮮明に蘇るのは延べ 7 年半にわたるインドネシアでの勤務ではなかったかと思われます。



ジャカルタ市内の様子

自給達成を強力に支援すべく、当時としては画期的であったと思われる、多数の関連のプロジェクトを束ねながら、同一の目標を達成すべく形成された「米増産アンブレラ計画」を強力に推進していました。これは現在、JICAで行われているプログラムアプローチのある意味での先例と考えられます。

インドネシアでの最初の勤務は1985年から1988年までの期間です。現地に赴任する丁度一年前の1984年のインドネシアはそれまで世界最大のコメの輸入国からコメの自給を達成した記念すべき年でした。当時のスハルト大統領がFAO総会で「コメの自給達成を」高らかに宣言した時で、インドネシア国民にとっては主食であるコメを心配なく食べることが出来る、待ちに待った時代の到来を告げる時期であったと思われます。そうした中で、JICAインドネシア事務所も同国のコメの

ジャカルタに赴任後、すぐに「稲病虫害発生防除予察計画」、「農業協同組合強化計画」、「ポストハーベスト技術改善」等のプロジェクトに携わり、インドネシア国家開発計画庁(BAPPENAS)、同農業省、同協同組合省のカウンタパートとの連日の様々なディスカッション、ジャワ島を中心にプロジェクトサイトでの現地農民との対話、更にはUSAID等他ドナーとの協議などを直接体験することが出来たことは、自分にとって極めて貴重な経験であり、技術協力・国際協力の在り方に関する一つの原点を見たような思いがしたことを今でもよく覚えています。

また、インドネシアでは特にBAPPENASにアメリカ留学中のクラスメートの何人かが学位取得後勤務しており、時に食事を共にしながら、彼らとのリラックスした雰囲気での会話の中で、大学院で共に勉強した開発理論と現場での開発事業の相違や、当時スハルト大統領が進めている強権的と思われる各種の開発政策や開発事業のメリットや各種の矛盾等についてかなり自由に意見交換が出来たことはインドネシアを理解する上で大きな足掛かりになったと強く思っています。

また、上記の「米増産計画」の他、ジャワ島と他の地域に位置する大学間の質的・物理的な格差を是正し、インドネシア国内での工業化を支えるための人材育成のための「インドネシア高等教育強化計画」の立ち上げに向けて、東京大学の故西野文雄教授(後に東京大学副学長)に同行して、約2週間インドネシアの地方大学を訪問し、関係者と協議しました。更にBAPPENASでの開発計画策定能力の強化を目的として経済開発モデルを策定する日本側責任者の市村真一京都大学東南アジア研究所所長(当時)との出会いがありました。また、中堅産業人材の育成に向けて、我が国の工業高専をモデルとして電気・電子分野でのインドネシア初のスラバヤ・ポリテクニク学院創設を直接担当できたことは、自分にとって最初の海外勤務であったことから「開発事業をどの様に進めるのか」、「開発援助受け取り国と協力ドナーの望ましき関係とは」等について正に

現場で考え、自分の至らなさを痛いほど思い知らされる貴重な機会であった強く思われます。



ジャワ島で稲を刈る農民

インドネシア・カウンタパートの多くが非常に自信に満ちていたことが強く印象に残っています。特に8月17日に行われた独立記念パレードは、数百発の打ち上げ花火と共に、この国の極めて明るい行き先を照らしている様で、自信と活気に満ちた人々の横顔は貧しさからの脱却を強く確信しているように見え、その後襲ってくる大きな危機を知る由もありませんでした。JICA 事務所での業務も同国の中進国入りを見据えた事業の形成が中心で、特に無償資金協力事業からの卒業に向けインドネシア側関係者と協議したことを記憶しています。

1988年8月末に日本に帰国後、10年間の国内勤務を経て再びインドネシアに事務所次長として赴任したのは1998年6月のことでした。その年は独立50周年に当たる記念すべき年で、順調な経済発展が続き同国の中進国入りに向けてのカウントダウンがインドネシア国民はもとより各ドナーにとって大きな話題となるほど国全体が活気に満ちており、10年ぶり再開した旧知の

こうしたすべてが順調に推移したインドネシアに不吉な予感をさせたのは、1997年タイで発生した同国の通貨バーツを襲った「通貨危機」でした。しかしながら当初はタイの危機は極めて限定的で、ジャカルタに駐在していたIMF、世界銀行のエコノミストも異口同音に「経済のファンダメンタルズに何ら問題の無いインドネシアにその影響が及ぶ可能性は極めて少ない」と、各種のミーティングで発言を繰り返しており、タイの危機は対岸の火災として扱われ、インドネシア国内の多くの関係者は極めて楽観的であった思われました。しかしながら、その後しばらくしてスハルト大統領の健康不安説が流布されると合わせるかのように、一挙にタイの通貨危機の影響がインドネシアに伝染し、国内の銀行経営が悪化しているとの噂と共に、多くの人々が銀行に現金の引き出しに殺到する所謂「取り付け騒ぎ」が発生し、その後危機の鎮静化のために派遣されたIMF 専門家チームによる各種の方策が実施されました。

しかしながら、状況は悪化する一方で、「金融危機（銀行への取り付け騒ぎ）」、「経済危機（買占め・売り惜しみ等による物価高騰・物不足）」、「政治危機（スハルト政権退陣・民主化要求）」、「社会危機（大暴動の発生）」といった危機の連鎖があったという間に国内に伝播していきました。そして危機の頂点として1998年5月13日～14日にかけてジャカルタ市内を中心に暴動が発生し、中国系住民が焼き討ち等の対象となり、数多くの犠牲者を伴う悲惨な事態となりました。こうした中で、当時インドネシア在留の邦人約1万人に対して事態の急激な悪化を受けて日本政府より「即刻全員国外退避」の指示が出され、日本の他、近隣のシンガポール、マレーシアへ避難することとな

りその緊急オペレーションが実施されることとなりました。

JICA 関係では専門家、青年海外協力隊員、コンサルタント、事務所員及びその随伴家族総計約 500 名が緊急国外脱出の対象となり JICA 事務所員全員でオペレーションを実施しました。専門家等の関係者が国外退避したのち僅かに残った JICA 事務所員もスハルト退陣と民主化を求める数十万人規模のデモにより国軍とデモ隊との間で大規模な衝突が予想されることから全員空港へ避難することとなりました。午前 4 時頃の薄闇の中、ジャカルタ市中心部の事務所から車で空港へ向かう車窓の向こう側に広がるジャカルタの高層ビルやその合間に広がる赤土で焼かれた独特の色彩の瓦屋根を見ながら、ふと心の中で僅か 2 年半前の華やかで自信に満ちた独立記念パレードの様子が脳裏をよぎり、「営々とした努力で築き上げてきた一国の繁栄がこんなに簡単に崩れてしまうのか、開発とは一体何なのか？ 国際協力はどこまで国造りに関わることが可能なのか？」といった思いが強くこみあげてきたのを今でも強く覚えています。

国際協力の醍醐味、面白さ、そして実際に事業を担当する案件を通しての達成感・充実感を強く感じたのが一度目のインドネシア駐在であったとするならば、開発の難しさ、国際協力の実施者として国造り・人造りにどの様に関わるべきなのか、といったより根源的な問題を直視させられたのが 2 度目のインドネシア赴任であり、インドネシアは正に私の国際協力・国際開発の原点であると思います。



ジャカルタ暴動（国会占拠）



民主化を要求する学生デモ

仕事上の喜びと苦勞

上記の様に、JICA での勤務を通じて数々の喜びとそれを得るための苦勞を数々経験してきましたが JICA を退職して数年が経過した今考えれば、何れも何にも代えがたい貴重な経験であり、素晴らしい思い出であると強く感じています。

また現在は、国際協力に携わってきた喜びを大学での業務を通じて全く別の形で日々感じています。それは、毎年夏休み等を利用してかなりの数の学生が開発途上国をバックパックで旅行していますが、そうした学生が帰国後、「旅行中 JICA のプロジェクトを見て、現地の人々がプロジェクトのお蔭で生活が楽になったと話すのを聞いて日本人として少し誇らしく思った」、「JICA 事業のお蔭で作物が例年多く取れるようになり、子供を高校に進ませることが可能となった」、「青年海外協力隊員と村の食堂で偶然出会い、日々の苦勞や仕事の話を通じて国際協力の重要性を少し理解できたような気がする」等

の話、少しはにかみながら日焼けした顔で報告してくれる学生の燃える瞳を見ながら、国際協力に携わってきて本当に良かったと思うのと同時に、先輩諸氏の努力により、日本の国際協力の思いは確実に若い世代に引き継がれていることを確信し、新たな喜びをかみしめている今日この頃です。

私の生き方

これが私の生き方です、と話すほどはっきりした生き方を持っている訳ではありません。生き方と言えるのかどうか解りませんが、今でも強く心に刻んでいることがあります。それは JICA に採用されてあまり時間がたっていない頃、当時の直属の上司に誘われて仕事帰りに立ち寄った居酒屋さんでの話で、上司から「君がこれからの社会人人生を有意義なものに出来るかどうかはこれからどれだけ本を読むかにかかっているとしっかり心に刻め」との話であり、併せて「読書は筆者との知的格闘技だ、読みながら作者と必死になって戦え、たとえ負けても必ず成長する」、「なるべく東西の名著と言われる古典を読み、古典派は知識の大吟醸酒。後から必ず効いてくる」等矢継ぎ早にお話を頂いたと記憶しております。当時はどれだけその重要性を理解していたか定かではありませんが、今思い起こせば心にじわじわと吟醸酒の様に効いてくる言葉であり、自分がこれまでどれほど読書をしてきたか非常に心もとない所ではありますが、これからも残された時間を使って読書し、筆者との知的格闘技を心行くまで十分楽しみたいとしみじみ考えております。